

嫩江流域におけるダウール(達斡爾)族の漁業事情

著者	珠 栄?
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	20
ページ	71-78
発行年	2001-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00002120

嫩江流域におけるダウール（達斡爾）族の漁業事情

珠榮嘎

キーワード： ダウール(Daur) 嫩江(Nenjiang River) 漁労(fishing)

1. 概況
2. 漁具と漁労方法
3. 魚場の占有
4. アラハで漁労する時の分配方法

1. 概況

ダウール人は黒竜江の北岸に住んでいた頃、狩猟・牧畜・農耕以外に、また漁労によって生活していた。清朝に帰順した後に、嫩江流域に移って来て、川に沿って居住した。毎年、テンの毛皮を貢ぎ物として朝廷に捧げる外、また嫩江産のヤバサ（雅把薩）魚をも貢ぎものとして捧げた。またもしチョウザメを捕ったなら、かならず朝廷に捧げた。敖福瑞氏が老人から聞いた話によれば、100年前（19世紀中葉以前）に、ダウール人はまた魚の皮で防寒靴の底や、キセル用の葉タバコを入れる袋などを作っていた。

ダウール人の間で次のような成句があるが、彼らの早期の生活や魚との関係を理解する手掛かりにもなるだろう。その成句を漢語訳すれば、「爸爸死了,草根鱼头该是我的了（父は亡くなった。草根魚の頭をたべるのは私の番だ、という意味）」となる。話によると、草根魚の頭が一番おいしく、以前草根魚を食べる時には、かならず魚の頭を目上の人に捧げ、目下の人はそれを享受することが出来なかった。

ダウール人は漁業生産に従事する歴史が非常に長いので、各種の魚の習性についてよく知っている。かれらは各種の魚の特徴に応じて、それぞれ異なる方法で捕る。伝えるところによれば、ジェロ（哲羅）魚は寝坊で、川辺に寝て恰も死んだ魚のようだから、以前ひ

とびとはそれを紐わなで捕っていた。また、チョウザメは変な格好のものに出会うと、まずしっぽでそれを引っぱたいて見る。ダウール人はこの特徴を利用して、長い針の先をきらきら光るまで鋭くといで、釣り針にして川に入れる。チョウザメがしっぽで引っぱたく時に、釣り針にひっかかってしまうのである。

ダウール語は、魚の名称に関して非常にくわしい。もともと同じ種類の魚であるのに、その大きさの違いによって、呼び方も異なる。例えば、大きいジェロ魚をコルブルといい、小さいジェロ魚をコルツァンという。大きい鯉をムルグといい、小さい鯉をコルティという。大きい鮒をケルテクといい、小さい鮒をカイクという。かもぐち（狗魚）とザリモ（扎日莫）魚は、大きさによって三つや四つの呼び方がある。大きいかもぐちをドージ、中型のかもぐちをチョルディ、小さいかもぐちをチョモという。ザリモ魚は4種類に分ち、それぞれチガンザリモ、ブダザリモ、モグザリモ、ナソルザリモという。

19世紀の末までは、ダウール人が魚を捕るのは、自分が食べるためであった。一年四季を通じて随時に漁労を行ない、大河川で集团的に漁労をするほか、普通は各自自分で、時には3～5人協力して行なう。大河川では主に大網を使い、20～30人参加しなければならない。魚が多い時は、また臨時に村の人を呼び寄せて網を引いてもらう。中東鉄路¹⁾の敷設は、チチハル市に繁栄をもたらした。それ以降は、嫩江の漁業産品が売れるようになり、ダウール人も売るために魚を捕るようになった。しかし運輸条件に制限されて、凍った魚しか売れなかった。そのため、冬季の漁業がもっとも盛んであり、その他の季節では、売るために魚を捕ることは非常に少なかった。

2. 漁具と漁労方法

ダウール人の漁具には、ダルロ、オリンク、カディ、ドウワン（中国名で兜網と呼ばれる袋状の網）、スレ（やす）、グアゴウ（中国名で挂钩と呼ばれる釣り針の一種）、アラハ（大網）などがある。アラハや鉄の漁具を外地から輸入するほか、その他の漁具はみな自分で作ることができる。売るために魚を捕る時は、アラハを使うことが多い。

以下に、ダウール人のいくつかの漁具及び用法を記す。

¹⁾ 東清鉄路ともいう。中国東北地方の満州里から綏芬河まで、哈爾濱から大連までの鉄路の旧称。1897～1903年に帝政ロシアが敷設したもの。

(1) ダルロは魚を捕るかごで、キセルより少し太い柳の枝や麻ひもで編んだものである。小さい湖や川の水が増えてできた池で、魚を捕るのに用いる。魚を捕る人は、それぞれ手にダルロを持って水に入り、魚が見つかったら、両手でダルロを垂直に押し被せる。魚が捕れたら、ダルロの口に手を差しのべ、魚を拾いあげて、シュンジュル（紐に結び付けた木の針）で差し連ねる。ダルロで魚を捕るのは、にぎやかな仕事である。人が多い場合は、一列横隊に並んだり、輪になって立ったりして、繰り返し繰り返して魚を捕る。ダルロの長所は、婦女や子供もみな使えることであり、その欠点は流れる水の中で魚をとることが出来ないことである。

(2) オリnkは柳の枝で編んで作ったもので、徳利のような形をしている。幅のせまい小川で使う。オリnkを口が流れに逆らうように河川に据えつけ、柳の枝で編んだすだれで、オリnkの口の両側をさえぎる。それで泳いでくる魚をオリnkの口を通して、魚がオリnkの頸の部分を通り過ぎるともう出られなくなる。

(3) カディは、中国名で挡梁子という。中小河流で使う。普通は秋に漁労をし、カディを斜めに河川に据え付けて、2枚のカディの間にオリnkを置く。河水はカディやオリnkの間を過ぎて流れていくが、魚はカディに遮られて、ゆるゆるとオリnkの口の方へ泳いで、ついにオリnkの中に入ってしまう。カディがオリnkと異なるところは、オリnkの両側を遮る柳の枝で編んだすだれよりもカディの方がずっと大きく、より多く、またより大きな魚が捕れる。オリnkはただ幅のせまい水の流れて小さい魚を捕るのに使う。カディを据えつけるのに、手間がかかるけれども、一旦完成すると、ひとりの番人を残して随時にオリnkから魚を取り出せばいいのである。或いは人を残さないで、定まった時間に人を差し向けて見回りさせ、魚を取り出させる。

(4) ドウワンは網である。最初のドウワンはダウール人が麻ひもで編んで作っていたが、後になって木綿糸で編むようになった。その形は袋のようで、木の弓で網の口をさえぎって展げさせて、河水に入れる。魚が入ったら、網の底に結び付けた縄が揺り動く。そして、漁師が網を引き始める。

(5) スレは、中国名で魚叉（やす）という。一年中使用される。スレで魚をつくのは、夜間に行く。少なくともふたりで協力すべく、ひとりには手にかばの木の皮や柳の枝で作ったたいまつを持って、魚をそば近く引きつけ、もうひとりにはスレで魚をつく。熟練者なら、一夜で10数匹の魚が捕れる。ダウール人は魚をつくことをゲルデベという。氷結期に魚をつく時は、氷を掘りひらいて柳の枝で編んだすだれを据え付け、中間に口をあけて、魚

を通らせる。開けた口の上方に番小屋を設けて、夜は明かりをつける。魚がすだれの口を通る時に、スレでつく。

(6) アラハは、中国名で大網や拉網という。くぎりを単位とし、長い網が必要な場合は、網をひとくぎりひとくぎりとは繋ぎ合わせる。ひとくぎりの網の広さは2丈²⁾、長さは4丈である。言うところによると、ダウール人には以前アラハがなく、それが後になってよその所から伝わってきたものである。かれらの持つ漁具のなかで、アラハの生産効果が最も高く、主に大河川の中で使う。聞くところによれば、20世紀の初め、嫩江においてアラハで重さ800斤の魚を一匹捕ったことがあり、また30年代に1張りのアラハで一年間に30余万斤の魚を捕ったという。アラハはいつでも使えるが、ただ氷結期に網を据え付ける方法が違うのである。氷結期に網を据え付ける方法は、次の如くである。もし川が西から東へ流れているならば、ユイウォズ³⁾(魚窩子)の西側の氷上で、直径約1メートルの穴を掘って、網の下水の口にし、ユイウォズの東側に直径2~3メートルの穴を掘って網引き出す口にする。網の下水口と網を引き出す口との間の距離は20~30メートルである。二つの口の間の距離を直径とする円周線上において、2~3丈おきに一つの穴を掘る。網を下水口から川におろし入れて、ワンゴウ(网钩。棒の先につけた钩)で、順ぐりに網を両側の穴に伝送する。網は網を引き出す口で接合し、ユイウォズを取り巻く。しかるのち網を引き出して魚を捕る。

3. 魚場の占有

嫩江とヌモル(讷莫尔)河⁴⁾沿岸地方におけるダウール族村落付近にある漁場を除いて、その他のところでは自由に魚を捕ることが出来る。嫩江とヌモル河沿岸にある漁場は、その付近の村落に集団的に占有されており、他村の人が魚を捕る時は、漁業産品の一部分を納めなければならない。聞くところによると、こうした漁場の占有は、漢族の人が入って来てから始まったのである。

嫩江もヌモル河もみな漁業産品の豊富なところである。魚類が商品になってからは、漁

2) 1丈は10尺で、3.333...メートルにあたる。

3) 魚の巣窟ともいうべき、魚の群がるところ。

4) 嫩江の東岸にある一支流。

業が当地のダウール人にとって、収入がわりに多い副業になった。民国初年におおぜいの漢族が当地に移入して来て、訥河県を設立した。それからは、ダウール人が自由に漁労することが出来なくなり、漁労するには公的な許可が必要で、また漁税を納めなければならない。漢族は、ダウール人が固有の漁場を自由に使用する習慣を利用して、漁場を占領した。ダウール人が自分の漁場の權益を保全するために、たえず闘争した。民国6年、訥河県と西ブトハ（西布特哈）⁵⁾ 当局は協議して漁場に関する紛争を解決し、嫩江沿岸における27箇所の漁場を、その付近の村（大多数はダウール人の村）に分け与えた。訥河県はダウール人の反対を避けるために、漁網の鑑札の発行や漁税を取り立てなどの事務を西ブトハ当局に引渡して、主管させた。漁場を有する村は戸あたりで網の鑑札をとる費用や漁場を祭る費用を分担する。漁場が収益（自分で捕った魚或いは外来の漁師からもらった割り前）をあげた場合は、戸あたりで分配する。

4. アラハで漁労する時の分配方法

アラハで魚を捕る時は、20～30人の組を作り、漁労経験に富む人をアウイダ（組長）に選ぶ。アウイダは漁労の全過程における指揮者であるばかりでなく、村を単位として漁場を占有した後に、つねづね自分の村の漁場を管理する。以前、一つの村の人は同じモクン⁶⁾に属し、お互いにとっても緊密であった。魚を捕る時に、誰のアラハを借用してもいいし、漁労をしてしまったら、いくらかの魚を持って行って、アラハを返せばいいのである。捕った魚は、漁労に参加した人によって均分される。魚を分ける時に、現場に来たよその人も、いくらかの魚を分けてもらうことができる。魚を多く捕った場合は、漁労に参加しなかった同じ村の家にも、魚を分け与える。水産物が商品化されて以降は、水産物の分配方法も非常に変わった。アラハなどの漁具については、固定した報酬をとるようになり、アウイダが分配のなかで受け取る分も少し多くなった。

分配に際しては、まず漁具や漁師や分配にあずかる権力を持つ家（漁税や祭祀の費用を負担する）を株の持主にして、そして株の数に応じて均等に配当する。

各種の漁具が分配にあずかる株数は次の如し。

⁵⁾ 嫩江を隔てて訥河県と相対するダウール族が居住する地方。

⁶⁾ 父系氏族の特徴を持つ血縁共同体。

アラハ	8 2くぎり	4 1株	(1くぎりを1株とするのもある)
氷穿 ⁷⁾	2 8箇	1 4株	
縄	1 2度 ⁸⁾	3株	
网钩	6箇	1株	(2株とするのもあり)
竿	100本		(普通、各自持参して行くので株としない)

以上合計59株になる。漁師が分配にあずかる株数は、普通の漁師が人ごとに3株とし、25人で計算すれば、75株になる。アウイダは6株とし(4株とするのもある)、合計81株になる。

分配にあずかる権利をもつ家はそれぞれ1株とし、60戸あれば、60株を占める。

以上総計200株である。仮に2,000斤の魚を捕り、1株で10斤の魚を分けとれるとすれば、漁具の持主は590斤、漁労に参加した人はひとりごとに30斤、アウイダは60斤、そして各家ごとに10斤の魚を受け取るのである。

以上は自村の漁場で漁労する時の分配方法であって、もし他村の漁場で漁労する場合は、獲物の一部分を納めなければならない。納める部分は、普通獲物の30%を占め、残りの70%は漁具や漁師の株に応じて均等に分配する。他村の人が自村の漁場に来て魚を捕る場合は、彼らの獲物の一部分を受け取って、自村の戸数に応じて均等に分配する。

ダウール語・満州語・漢語・日本語の魚名対照表

<ダウール語>	<満州語>	<漢語>	<日本語>
オルグ	アザ	鯉魚	チョウザメの一種
コルブル	ジェロ	大哲罗魚	
コルツァン	——	小哲罗魚	
ジェボク	ニユムソン	細鱗魚	マス的一种
ヤバサ	ヤバサ	雅把萨	

⁷⁾ 氷を砕く道具、槍の形をしたもの。

⁸⁾ 両腕を左右に伸ばした長さ。約5尺。

ムルグ	ムジュホ	大鯉魚	コイの一種
コルティ	——	小鯉魚	コイの一種
ケルテク	ウンゴソン	大鯽魚	フナの種類
カイク	ハイホア	小鯽魚	フナの種類
ダルバルジ	——	馬口魚	ハスの一種
ソアガス	——	雅羅魚	ウグイの種類
アムル	フユ	大草根魚	クサクイウオの種類
ウンチュル	——	小草根魚	クサクイウオの種類
シルポ	ドボホ	重唇魚	
ハイホ	——	扁花魚	ヒラウオの種類
ケルポ	ケルフ	法羅魚	ヒラウオの種類
ドルドロ	ザジヘ	刀子魚	
タク	タク	胖頭魚	クロタナゴの仲間
チェツウ	セツウ	杆条魚	
ブドク	ブドグ	黄姑子	コイチの仲間
ドルラティ	——	怀頭魚	
アクオ	アチャ	嘎牙子	
ハダル	ハダラ	——	——
モルゴルジン	マイハト	——	——
ドージ	ドヤン	大狗魚	クワカマスの種類
チョルディ	ゴウサン	中号狗魚	クワカマスの種類
チョモ	チョルホ	小狗魚	クワカマスの種類
キャトズス	——	大马哈魚	サケの種類
クアル	ホアラ	黑魚	ライギョの種類
ラグ	ドワラ	鮎魚	ナマズの種類
ディオログ	ジェルム	——	——
フクルスウリ	ハツ・ウンツェン	——	——

ハラホスウ	フセリ	——	——
アブガ	オハ	——	——
フラナ	ソンガダ	——	——
コトマル	アクヤン	——	——
アンガティ	オツァン	——	——
ダルバ	ラファハ	——	——